

# 慶應義塾大学 論理と感性のグローバル 研究センターの歩み

岡田光弘

センター代表

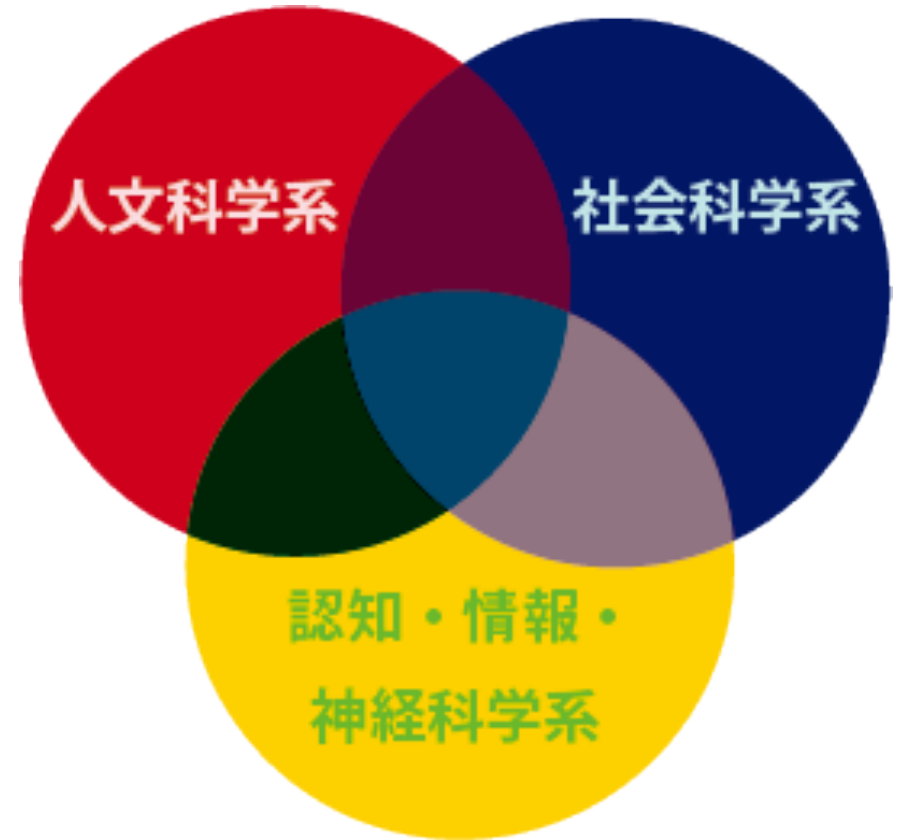
(スタートアップセンター第2年度(2013)から  
正規センター第6年度(2019年度)まで)

# 論理と感性のグローバル研究センター 継続申請補足資料

## 新しい学際的方法論導入による分野横断研究

人間の判断・行動・意思決定等のメカニズム解明のために、「心—脳—身体行動」を分野融合的に研究している。特に「心」に関わる人文科学、「行動」に関わる社会科学、「脳や情報処理プロセス」に関わる神経・認知・情報科学の分野融合的研究手法を導入し論理と感性研究を進めてきた。

センターの構成員(メンバー)が5学部+複数の大学院研究科に所属し分野横断的に関与しており、そして、共同研究員なども加えて幅広い分野を網羅し、包括的・発展的な研究が実現されている。



# これまで6年間の成果

- センター学術会合開催：学会・集会主催・共催数：国内会合27、国際会合37  
(特に、公開分野横断全体報告会、国際連携拠点 (CNRSなど)との公開会議を毎年度継続してきた。)

- 研究成果の出版：主な出版論文数301編、主な学会発表数365本。

出版学術雑誌の例：Brain and Nerve, NeuroImage, Brain Research, Cognitive Science, Critique, Behavior Analysis in Practice, Philosophical Transactions of the Royal Society B, Journal of Motor Behavior, International Journal of the Philosophical Association of Japan, Intelligence, Annals of the Japan Association for Philosophy of Science, Synthese, 思想, 現代思想, 哲学, 科学哲学, 美学, 現代儒教, Current Anthropology, Research in Autism Spectrum Disorders, Developmental Science, J. Visual Language & Computing,

この他、認知神経心理学系成果の書籍 (Springer, 2017), 人文系と社会科学系の共同企画・編集主導による特別号J.Neuro-Decision Making, Frontiers (2015-2016)等の出版。

## 新しい手法による「論理」と「感性」研究の成果例

- 哲学・論理学の理論と行動遺伝学・心理学・認知科学の実証的研究を組み合わせて推論・直観・意思決定研究の新たな知見を得た。
- 美的判断や美術鑑賞の理解に脳科学を含む実証科学的観点を導入しその有効性を確認した。
- 機能脳画像データと生理学的指標とを組み合わせた研究手法の発展させ本テーマ研究に適用し成果を得た。
- NIRSによる機能脳画像データや各種行動データを用いて、乳幼児を対象とした本テーマ研究で成果を挙げた。
- 動物の推論と共感性について、比較認知心理学研究を行い、人間の推論、共感性の基盤構造についての理解を深めた。
- 成果の社会的還元につながる応用研究を行った。発達支援、発達障がい児支援、支援者トレーニングなどの分野で貢献した。これに関する多くのチュートリアルも行った。

# 主な国際連携協力体制形成例

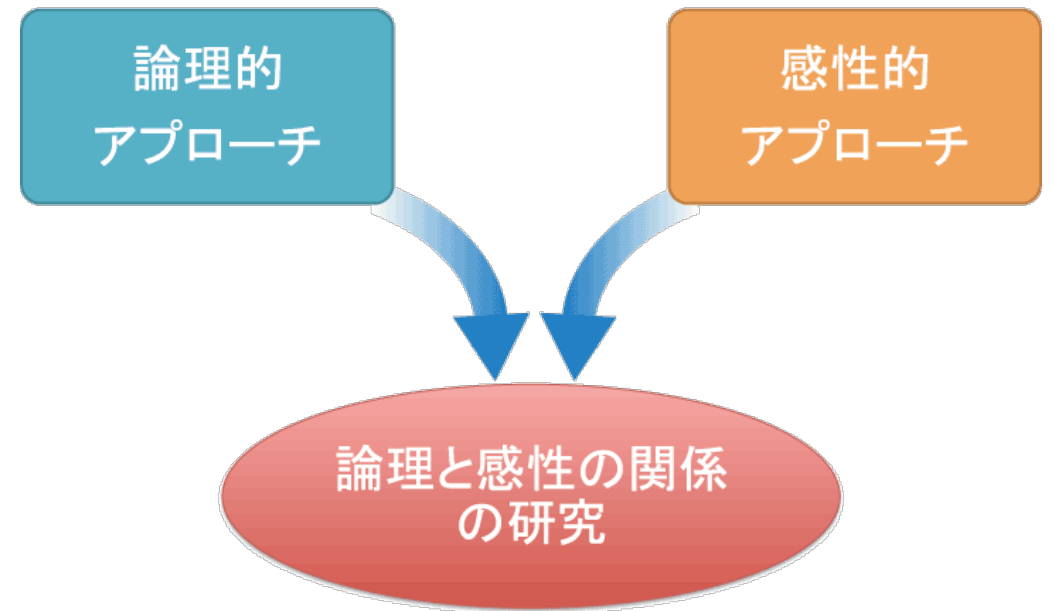
1. 本スタートアップ時に、フランス国立科学研究センター（CNRS）－慶應義塾大学との包括協定が締結。（我々が締結協力）⇒ それを受けて、  
毎年度共同ワークショップを開催、相互共同研究訪問、相互博士課程・ポスドク派遣・共同指導。
2. ウィーン大学との社会科学系と人文科学系を横断する大学間研究協力を本センターが積極的に参加。2019年CNRS-President Antoine Petitの義塾訪問、義塾との包括協定改訂の準備の役割を果たし、共同研究計画について協議した。本センターのフランス側パートナーが5年間のCNRSサポートを受け、義塾本センターのJSPSから5年間のサポートを受け、共同研究を推進している。
3. ケベック大学モントリオール校（UQAM）の学長の2回の訪問（2016年度と2018年度）と研究担当副学長の訪問（2018年度）を受け、2018年度からQUAM及びカナダ大学間連携センターCIRSTと共同研究開始。
4. 本センター情報論理・倫理グループがフランス国立情報科学研究所(INRIA),NICT, SFC-WIDEグループと連携し、2014年度から日仏情報セキュリティ・情報プライバシー・AIの倫理に関する国際協力を開始し、全ての日本側会議を本センターがSFC-WIDEグループとともに担当。2
5. このほか、ウィーン大学との連携協力を始め、多くの国際連携形成、国際連携学会開催、連携共同研究、海外研究者の受け入れ、博士課程学生・ポスドク学生相互派遣を行ってきた

# 本センター研究の特徴

人間の判断や行動における「論理」と「感性」のそれぞれの側面の研究成果に基づき、「論理」と「感性」の「関係性」研究へ

特に、

- A.両者の補完的関係の理解を深める。
- B.両者の関係の基盤的メカニズムの解明を進める。（神経科学、発達科学などを含めた多層的研究手法を用いる。）
- C.両者の関係の理解に基づいて、社会的還元に向けた応用研究を進める。



# 本センター沿革・発展史(18年度間連続)

21COEとグローバルCOEを継承し、人の判断や行動における論理と感性の側面について多層的に解明することを目的としてきた。特に、哲学、倫理学、論理学、美学美術史学、文学、考古学などの人文系手法と心理学、行動科学、教育学、発達科学などの社会科学系手法を中心に、これに神経科学、認知科学、情報科学手法を加えて、論理と感性の学際的な研究を行っている。これを通じて人間のより深い理解を目指すとともに、成果の社会還元を目指している。学際性、国際性、若手研究者育成を重視している。

21世紀COE 心の解明に向けての統合的方法論構築  
2002年度—2006年度



グローバルCOE 論理と感性の先端的教育研究拠点  
2007年度—2011年度



スタートアップ 論理と感性のグローバル研究センター  
2012年度—2013年度



論理と感性のグローバル研究センター  
2014年度—現在

# 基礎研究の社会的応用にも重点を置いてきた

- 多層的発達支援・障がい児支援・支援者教育プログラム開発  
(発達科学、認知神経科学)
- 多層的精神医療支援 (神経医学、認知神経科学、認知神経発達科学、医療人類学)
- 多層的意思決定支援 (グラフィック推論、図的論理、グラフィック多属性意思決定)
- 多層的研究倫理・研究検証 (研究倫理、実験検証、サイバースペース倫理)
- 論理教育・感性教育への取り組み
- 多層的美的評価・美術史研究の社会還元、ほか多数